

念頭に置けば、これらの拡散の地方において、信徒数の減少がたった数十年の間に生じ、特に迫害の時期にそうであったことが、理解しやすくなります。しかし、改革派の人数が十分に多く、集中していた地方においてさえ、多数派を占めるような小郡(canton)はほとんど存在せず、稀少でした。

この古くからの弱点に、近代の拡散現象が加わります。それは、十九世紀に始まり、二十世紀に一層強化され、現在の状況にも大きく影響を及ぼしています。この現象は、産業化や都市化を経験した全ての国に見られるものですが、とりわけフランスでは、集権的である国家の積極的介入のゆえに特に顕著でした。農村からの人口流出、特に第一次大戦後の現象も強調する必要があります。この流出はまだ終わったとはいえ、1950年代から80年代にかけて、一層強まっています。これにより、かつては非常にプロテスタント的であった地方全体から、住民がいなくなっています。最も特徴的なケースは、南のセヴェヌ地方です。ここは、特に改革派が強かった地域であり、アンシャンレジーム期の迫害に対し武力闘争さえ起こしましたが、現在では、人口の大多数とともに、改革派の多数を失っています。これらの伝統的な農村社会では、カトリックより識字率の高い改革派は、カトリックより土地を離れた時期が早く、また流出した人数もより多かったことを認めねばなりません。ところで、流出した改革派が行き着いたのは、改革派でない人々が圧倒的多数を占め、そこに溶け入ってしまうような、地方や都市でした。同様に、ニームやストラスブルといった、プロテスタントが多数派を占める都市では、また、ラ・ロシェルやヴァランスといった、少数派ではあってもある程度まとまった人数のいる都市では、カトリック人口の流入により、改革派の人口比は弱められることになりました。その結果、フランスのいかなる場所においても、プロテスタント主義は、もはや多数派ではなくなりました。かつて多数派であった場所も、そうではなくなり、かつて濃密であった農村地方において、人口は減少しました。パリは、十九世紀にプロテスタントのかなり強い集中をみたのですが、ここ二十年は逆に、郊外へ人口が流出するという、拡

散現象が見られます。

この地理的拡散現象がもたらしている問題を、手短に指摘しておきましょう。改革派の家系的背景を持つ人々にとって、拡散の傾向は、教会離れの危険をもたらしています。というのは、教会との結びつきは、村、あるいは小郡といった、非常に限られた地域に根ざした、教会以外の関係(家族的・社会的・文化的)と重なりあっているからです。他方、たとえ離散した改革派が、教会との結びつきを失っていなかったり、断ち切っていない場合でも、信徒が何十キロも離れて広がっているという、新しい教区の物理的困難があります。しばしば、牧師は、訪問や子どものグループの教理問答のために、車で移動に多くの時間を費やします。結局、非常に拡散した教会では、中心に残った人々が、濃密で定期的な、目に見える形での活動(例えば集団的な聖日礼拝のような一訳者)を行うことは、より困難です。そういうわけで、ここ数年の間、年に一回だけ地域の集会がなされる形式が、非常に成功しています。そこでは大人数の信徒が集まり、励ましとなります。これにより、皆の目に見える形で教会が存在することが可能となりますが、今の社会においては、現代的なメディアの影響により、この種の集団的マニフェストが重要視されるようになっているのです。

拡散という現代的事実の結論として、次の2点を強調するのがよいでしょう。

1. 信徒の拡散は、幾つかの利点をも、もたらしています。物質的・社会的手段は乏しいにせよ、至る所に教区が組織されるようになり、国土の全体に活動が広がっています。今日、プロテスタントの信徒や牧師に会いたいと願っても、それができないような地方や都市は、ほとんどありません。

2. 信徒の拡散は、恐らく、ある種の神学的・霊的発展を加速化したでしょう。フランスの改革派教会は、改革者たち(特にカルヴァン)の意志により、過去の歴史において多数包括主義(multitudinisme、少数精鋭主義でないという意味での一訳者)でした。これは教会が、洗礼、とくに幼児洗礼を受けたすべての信徒を集めるべきである、ということを示唆します。教会は、しばしば